

ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（５） エピダウロスのアポロン・マレアタスの聖域

高橋 裕子

Early Iron Age Sites in Greece（５） The Sanctuary of Apollon Maleatas in Epidauros

TAKAHASHI Yuko

The Sanctuary of Apollon Maleatas on Mount Kynortion in Epidauros is the subject of the fifth paper in the series “Early Iron Age Sites in Greece”. It delineates the religious characteristics of the site in the Early Helladic III through the Middle Helladic, the Mycenaean and the Geometric periods respectively.

はじめに

ギリシアでは初期鉄器時代の後期、すなわちおそらくポリスが誕生したと推察されている頃に神殿が建造されるようになり、政治的要素のみならず宗教的にも大きな変化があったことが確認されている。ただしこの時代の宗教もしくは信仰に関する資料は神殿に限定されるわけではなく多岐多様である。そしてそれらを詳細に吟味していくことは、当時の社会を解明していく上で必要不可欠な要素である。

そこで本稿においては幾何学文様期の祭壇が出土したことで著名なエピダウロスのアポロン・マレアタスの聖域を取り上げ、当該期の宗教や信仰の具体像を解明するための基礎的作業としたい。そしてそれに際しては、とりわけ初期鉄器時代に聖域が設けられた場所はどのような特性を有する土地であったのかという問題意識を念頭に置いていきたい¹。

遺跡の概要

アポロン・マレアタス²の聖域は医療行為が行われたことで著名なアスクレ

ピオスの聖域から1 kmほど東方に位置しており、キュノルティオン山の頂に営まれた遺跡である³。アスクレピオスの聖域が平地に設営されているのとは対照的に、高所という立地がこの遺跡の特徴の一つである。現在でも使用されている大劇場を有し観光地としても人気が高いアスクレピオスの聖域と比べると一般にはあまり知られていないが、パウサニアス（2.28.7）に言及があることから察せられるように古代においてはある程度の知名度を誇った聖域であろう。また宗教施設の歴史としてはアポロン・マレアタスの聖域の方が古くまで遡ることができ、さらにアスクレピオスの聖域が発展した後でもその重要性が失われることはなかった。

この遺跡においては既に19世紀にP・カヴァディアスによって発掘が行われていたが⁴、本格的な調査は20世紀半ばになってからと見なし得よう。I・パパディミトゥリウによる一連の発掘が行われ、その後V・ランプリヌダキスがそれを引き継いだ。両者の調査により大きな成果が得られ、20世紀後半においてこの聖域に対する注目が高まっていったと言える。さらに1995年には青銅器時代に焦点を当てたA・セオドルウ＝マヴロマティディの調査や研究も開始され、この遺跡に関しては現在に至るまで幾つもの論文や報告が発表されている。

山頂という限られたスペースではあるが繁栄した聖域であったため、この遺跡からは青銅器時代からローマ時代に至る数多くの資料が発見された⁵（図1）。建造物に関してはローマ時代の遺構が目立つが、古典期の神殿も発掘されている。また土製像は合計で1300もの破片が発見されており、その時期は青銅器時代からローマ時代に及んでいる⁶。高所という立地にも関わらず長期にわたって人気を博した聖域であったことは明らかであろう。また医療用の器具も発見されており⁷、医療施設として有名なアスクレピオスの聖域との深い関係を推察させる⁸。

このようにアポロン・マレアタスの聖域からは様々な時代の多様な遺物が出土しているが、本稿においては青銅器時代および初期鉄器時代の資料を検討することにより、所期の目的を果たすこととしたい。

青銅器時代

この遺跡における青銅器時代の人的活動は、大きく三つの時期に区分される（①初期青銅器時代Ⅰ～Ⅱ期、②初期青銅器時代Ⅲ期～中期青銅器時代、③ミケーネ時代）。その内最初の時期においてはこの場所は居住地であり、その住

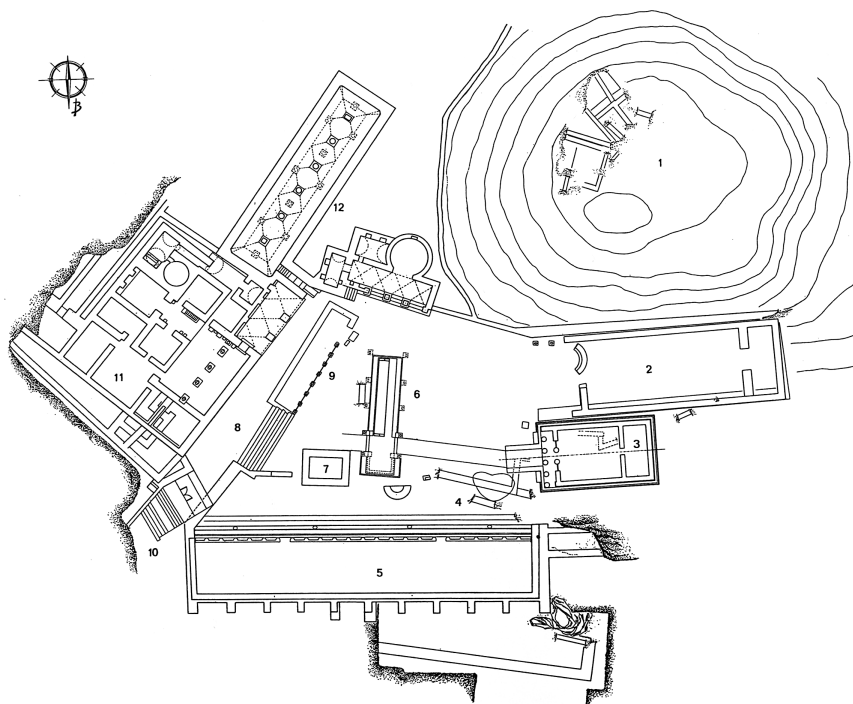


図１ アポロン・マレアタスの聖域全体図（方位は図の下側が北方向、
1：初期青銅器時代の建造物群および中期青銅器時代の穴がある頂上部、3：古典期の神殿、
出典：Lambrinoudakis no date, 139)

居址が廃棄されたあと聖域として発展していった。以下、それぞれの時期について見ていくこととしよう。

①初期青銅器時代Ⅰ～Ⅱ期

この遺跡からは新石器時代の土器片も若干発見されているが⁹、現今の公表資料に鑑みるならば本格的な居住の痕跡が確認されるのは初期青銅器時代に入ってからである。初期青銅器時代Ⅰ期に関しては数多くの遺物が発見されており、その中には一般にフライパンと称される土器の破片も含まれていた¹⁰。フライパンはキクラデス諸島からの搬入品であり、さらにメロス島の黒曜石で作られた石器も出土している。搬入経路も含めてキクラデスの島々との関係が

議論されよう¹¹。またこの時期に関しては3基の土壙墓も出土しており、それぞれ屈葬の遺骸が発見された。その内3号墓の被葬者は18～20歳の女性であり、魚の歯などを材料としたペンダントを身に着けていたことが判明している¹²。

初期青銅器時代Ⅱ期に関しては三つの時期に区分される建造物群が確認されており¹³、発展した居住域であったことが看取される。しかしこの時期の終わりにはキュノルティオン山頂における住居址は使用されなくなる。発掘調査の結果によれば破壊を受けた痕跡は発見されなかったため放棄されたと推察されているが、その理由は不明である¹⁴。

②初期青銅器時代Ⅲ期～中期青銅器時代

住居址が放棄されたあとこの場所は信仰の場へと変化し、それ以前の建造物が廃墟化した場所に大型の穴が掘られた¹⁵。不正形な楕円形で直径は3×4m、深さは0.80mである。初期青銅器時代の遺構を一部破壊して掘り込まれており、多数の遺物が発見された。土器片の数は2090を数え、大半は鉢やゴブレット、カップなど飲用のためのものである¹⁶。また動物の骨は762片出土しており、その内52片は焼成を受けていた。動物の種類としては羊、牛、豚、鹿が確認されている¹⁷。それ以外にも黒曜石を含む石製品や灰などが発見されており、さらに穴の外側からではあるが香をたくために使用されたと推測される土器も出土している¹⁸（図2）。これらの遺物は長期にわたってこの場所で動物犠牲を伴う儀礼行為が行われた痕跡であることは明らかであろう¹⁹。そしてこれがキュノルティオン山における宗教活動の始まりである²⁰。またこの頃この場所は居住されていなかったのもので、他所からそのために訪れていたと推察される。

上記の穴は石で覆われ、塚が形成された。そして中期青銅器時代以降この場所には一切の建造物が建立されることはなく、おそらくは意図的に手つかずのままの状態に置かれていたと解釈されている²¹。この山頂一帯における信仰の中核的存在として重要な役割を担っていたということであろう²²。ただしヘレニズム時代になると周辺が壁で囲まれ、さらにその後ローマ時代にはその周壁が一部再構築された。この場所が古代を通じて聖なる場所と見なされていたことを看取することができる²³。

③ミケーネ時代

中期青銅器時代とは場所や特性に変化が生じたが、ミケーネ時代においてもキュノルティオンの山頂一帯は聖域として発展していった²⁴。この時代の宗教



図２ 宗教儀式に使用されたと推測される土器
(出典：Theodorou-Mavrommatidi 2010, 532, fig.5)

関連資料は概説書にも取り上げられることが多く、ミケーネ時代の宗教を論じる上で重要な存在となっている²⁵。中期青銅器時代との相違点も含めて、この時代の宗教活動の特徴や遺物について記していこう²⁶。

１）場所

ミケーネ時代には、初期青銅器時代の住居址があった頂上部ではなく、その20m前後北側、なおかつ5mほど下った場所に聖域が発展した（図１の建造物２および３の一带がミケーネ時代の資料の出土地点）²⁷。すなわち中期青銅器時代とは異なり、ミケーネ時代の宗教活動の中心地は北側斜面へと移動したことになる。そこから犠牲獣を焼いた灰の堆積や遺構が発見されている²⁸。

初期青銅器時代の建造物があつた最も高い地点で宗教儀式が行われなかつたのは偶然ではなく、おそらくは意図的に避けられたためだと推察されている。先にも記した様にそこが聖なる場もしくは信仰の中核や起源として重視されたがために、儀式はその周辺で行われたと考えられている²⁹。

2) 奉納品

ミケーネ時代の奉納品としては、土器や土製像をはじめ多数の遺物が出土している³⁰。例えば著名なものとしては戦車を引く馬と推測されている大型土製像があり、簡略化された形態ではあるが秀逸な製品である³¹（図3）。厚さが薄い上に前足と後ろ足がそれぞれ1本ずつしか作られておらず³²、この個体だけでは自立することは不可能である。一般に複数の馬で戦車を引く場面を表現した造形作品の一部であると見なされており、その可能性はあるように思われる³³。

さらにそれのみならず、ミケーネ時代の奉納品には戦闘にまつわるものが多い。とりわけ青銅製の剣や槍先、両刃の斧（ダブル・アックス）などの武具または武具をかたどった奉納品が出土していることは注目に値しよう³⁴。また戦いの場面と解釈されている図柄が表現された石（ステアタイト）製のリュトンも出土している³⁵。このような傾向は中期青銅器時代には見受けられずミケーネ時代に入ってから出現する特徴であり、おそらくは信仰ないしは宗教活動の性質や傾向が変化したと推察されよう³⁶。

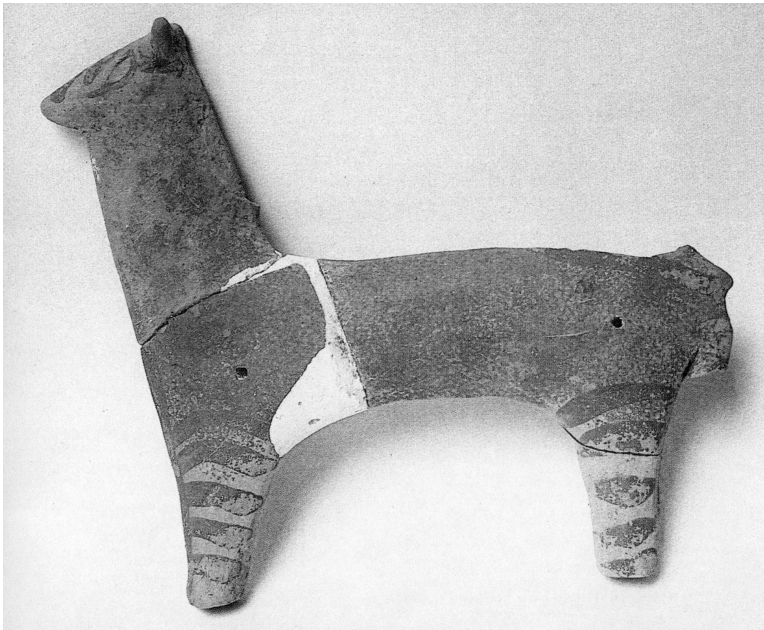


図3 ミケーネ時代の馬形土製像（出典：Lambrinoudakis no date, 141）

3) キクラデス文化の石偶

ミケーネ時代の聖域からは、珍しい遺物が出土している。初期青銅器時代のキクラデス文化の石偶である。大理石像の破片（高さ5cm）で、首から上の頭部のみが発掘された³⁷。この遺物が出土した層位からは初期青銅器時代や中期青銅器時代の土器片も見られているが大半はミケーネ時代の遺物であり、ミケーネ時代に年代付けられる土層であろう。とするといつの時期にどのような経緯を経て、初期青銅器時代にキクラデス諸島で制作された石偶がミケーネ時代のエピダウロスにもたらされることになったのかが問題となる。

この点に関しては二つの仮説が主に想定されよう。既に初期青銅器時代にこの場所に持って来られていたという意見と、ミケーネ時代に入ってからという意見である。ただしいずれが正しいのか確実な答えを導き出すことは難しい³⁸。またこの石偶がミケーネ時代にいかなる意味合いを有していたのかも必ずしも明らかではないが、宗教行為と関連がある可能性は否定できないであろう³⁹。

ミケーネ時代のこの聖域における宗教活動は、中期青銅器時代のそれと比較すると場所や奉納品の特徴に変化が見られる。そしてそれはおそらく、儀礼行為を行う人々ないしはその集落が置かれた社会的背景の相違を反映しているよう。

初期鉄器時代

初期鉄器時代の前半期に関しては資料が発見されていないが⁴⁰、その後半にはやはり宗教活動が行われたことが確認されている。古典期の神殿の北東側から石が敷き詰められた不正形の遺構が発見されており、屋外の祭壇と報告されている⁴¹（図4）。設営された時期は幾何学文様期で⁴²、その後それは前古典期においても使用された。

初期鉄器時代の宗教施設はギリシア全域を視野に入れても必ずしも多いとは言えない中で貴重な資料ではあるが、遺憾なことにこの遺構に関しては概報しか発表されていない⁴³。それでも出土した土器片の中には後期幾何学文様期のアッティカ製⁴⁴やコリントス製のものが含まれていることや、青銅製品および石製印章なども出土していることが明らかにされている⁴⁵。幾何学文様期の遺物は数が少なくこの聖域が本格的に発展していくのは前古典期に入ってからであるが、それでも既に初期鉄器時代の後期に繁栄の兆しがあったことは確かであろう。またこの頃の信仰の中心的な対象に関しては、ランブリヌダキスがア

ポロンであったと推察している⁴⁶。

青銅器時代に聖域であった場所が数百年間にわたる空白期間を経て改めて聖なる地と見なされるようになった事例として、初期鉄器時代におけるこの遺跡は大きな意味を有している。

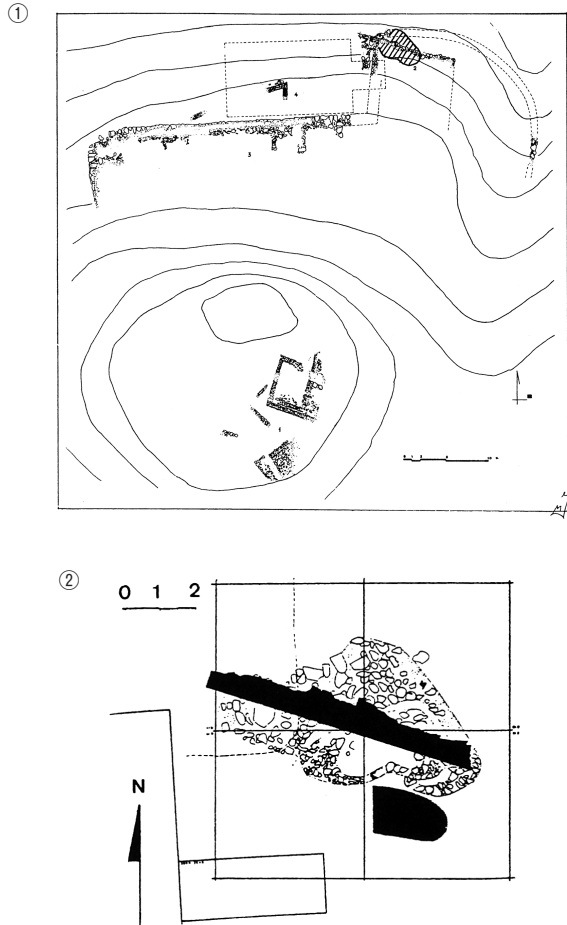


図4 幾何学文様期の遺構

(1)斜線部分が当該遺構、出典：Mazarakis Ainian 1997, fig.241.

(2)遺構図面、出典：Mazarakis Ainian 1997, fig.240)

おわりに

エピダウロスのキュノルティオン山の頂は、青銅器時代においても初期鉄器時代の後期以降も聖域であった。初期青銅器時代Ⅰ～Ⅱ期においては居住地であった場所が初期青銅器時代Ⅲ期から信仰の場となり、中期青銅器時代にかけて儀式が行われたことが確認されている。おそらくはかつてそこに住んでいた祖先たちへの崇敬の念に基づくものであったであろう。その後ミケーネ時代になると、初期青銅器時代の建造物群の北側で宗教活動が行われるようになった。この時期には武具が奉納されており、信仰や儀式の性質に変化が生じたと推察される。その後数世紀の空白期間を挟んで、初期鉄器時代の後期に新たに聖域として使用されることになった。

前7世紀の後期から前6世紀にかけてこの聖域は繁栄を謳歌するようになり、前550年頃には神殿が建立される⁴⁷。古典期の神殿の下からその遺構が発見されており⁴⁸、本格的に設備が整ったと言える。その一方で、ランブリヌダキスによればおそらく聖域の発展に伴ってより大規模なスペースが必要となり、別の聖域が設営されていく⁴⁹。それがアスクレピオスの聖域であり、近隣の平地に造営された。

ところで初期鉄器時代に山上で儀礼行為が行われた事例としてはキュノルティオンが唯一の存在ではなく、アッティカのヒュメットスに関しても報告がなされている⁵⁰。ヒュメットスの山頂は初期鉄器時代でも前半期から聖域として使用された痕跡があり⁵¹、前古典期にかけて発展した。初期、中期、後期青銅器時代の遺物も出土しているが青銅器時代の資料は数が少なく、初期鉄器時代以降の聖域としての使用との関係は不明である⁵²。

これに対してエピダウロスのキュノルティオンの聖域は、明らかに青銅器時代の痕跡と関係があろう。ミケーネ時代の資料と初期鉄器時代のそれとの間には数百年間の空白期間があり、継続的に宗教活動が行われていたわけではない⁵³。それでもおそらくは青銅器時代の人的活動の痕跡が山頂という立地やその景観と相まって、幾何学文様期に入ってからこの場所が特別で神聖な場所と認識される契機を与えたと思われる。それが初期鉄器時代以降の聖域としての端緒となったのであろう。

初期鉄器時代の宗教に関しては、ボリス成立期における神殿の誕生が最も注目を集めてきたテーマと言える。ただし本稿冒頭にて記した通り、この時代の宗教や信仰に関する資料は多様であり、それらを詳細に検討することはこの時代の特性を考える上で重要である。かかる資料状況および研究傾向の中で、キ

ユノルティオンの聖域が有する意義は大きいであろう。

- 1 古代地中海世界における聖域の立地に関して包括的に扱っている文献として、浦野2017。
- 2 馬場恵二は「当初は地元の半神マレアタスが祀られていたが、そののち同祭祀がアポロン祭祀と融合して、アポロン・マレアタスの神格が生まれた」と記している（馬場恵二訳、パウサニアス『ギリシア案内記（下）』岩波書店、1992年、370頁）。またアポロン・マレアタスに対する信仰はラコニアやメッセニアでも確認されている（Pavlidis 2018, 280-290, esp.289, n.56）。
- 3 遺跡の概要に関しては、Lambrinoudakis 2002, Mee & Spawforth 2001, 210-212.
- 4 Cf. Papadimitriou 1949.
- 5 この遺跡に関する図面の中に南北が逆なのではないかと疑われるものがある（Theodorou-Mavrommatidi 2010, 531, fig.1, Lambrinoudakis 2019, 121, fig.145）。それらの図面において矢印は北方向を示していると思われるが、逆ではないであろうか。
- 6 Πέππα-Παναϊωάννου 1985, 23.
- 7 *PAE* 1976, 1978, 209, pl.148γ.
- 8 馬場恵二は「エピダウロス市からアスクレピオスの聖所に参詣する人たちは、道順から言っても、先ずアポロン・マレアタスの祭壇に詣で、次いで医神の聖所に向かって山を降りて行く」と記している（馬場恵二訳、パウサニアス『ギリシア案内記（下）』岩波書店、1992年、370頁）。
- 9 Theodorou-Mavrommatidi 2004, 1169.
- 10 Theodorou-Mavrommatidi 2004, 1170, plate 6a: 5-6. この遺跡から出土した他のフライパンの破片として、*PAE* 1949, 1951, 95, fig.5.
- 11 Theodorou-Mavrommatidi 2004, 1170.
- 12 Theodorou-Mavrommatidi 2009. またこれらの墓に関しては、cf. *PAE* 2000, 2003, 67-69, Theodorou-Mavrommatidi 2003, 256-259.
- 13 Theodorou-Mavrommatidi 2004, 1173-1177, Theodorou-Mavrommatidi 2010, 524-525. 発掘報告として、*PAE* 1999, 2002, 113-115, *PAE* 2001, 2004, 57-59.
- 14 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 525.
- 15 穴が掘られた年代に関して、中期青銅器時代と記載する文献と（Lambrinoudakis 2019, 120）、初期青銅器時代Ⅲ期とする文献がある（Theodorou-Mavrommatidi 2009, 774）。この遺跡に関して青銅器時代を中心に調査や研究を行っている研究者の意見は後者であり、初期青銅器時代Ⅲ期に掘られて中期青銅器時代にも使用されたと記されている（Theodorou-Mavrommatidi 2009, 774）。土層や出土土器の年代に関しては、Theodorou-Mavrommatidi 2010, 525-526.
- 16 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 525.
- 17 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 525. ただし鹿に関しては、角は発見されているが骨は確認されていない（Theodorou-Mavrommatidi 2010, 525, n.19）。
- 18 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 526, 532, fig.5.
- 19 ランプリスダキスは祖先崇拜という解釈を提示している（Lambrinoudakis 2019, 120）。

- 一方でコミュニティの一体感を高め、領域の境界を明確にする意図があったという意見もある（Theodorou-Mavrommatidi 2010, 527）。
- 20 Lambrinoudakis 2019, 120, Theodorou-Mavrommatidi 2009, 774.
- 21 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 526-527.
- 22 Cf. Lambrinoudakis 2019, 120.
- 23 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 526.
- 24 ミケーネ時代の居住が確認されたと記す文献もある（Lambrinoudakis 1981, 63）。ただし、cf. Theodorou-Mavrommatidi 2010, 527.
- 25 一例をあげるならば、Lupack 2010, 269.
- 26 ミケーネ時代のこの遺跡の宗教活動に関して、ミノア文化の山頂聖域（peak sanctuary）と同種の性格を有すると記す文献があるが（例えば、Lambrinoudakis 2002, 214, Wright 2008, 249, 251-252）、筆者はそれに賛成しない。上記の文献以前のライトの意見として、Wright 1994, 68.
- 27 Theodorou-Mavrommatidi 2010, 529. Cf. Lambrinoudakis 2019, 121, fig.14.5.
- 28 Lambrinoudakis 1981, Lambrinoudakis 2019, 122-123. また発掘報告として、*PAE 1987*, 1991, 52-58, *PAE 1991*, 1994, 71.
- 29 Cf. Theodorou-Mavrommatidi 2010, 527.
- 30 Lambrinoudakis 1981, Wright 1994, 68.
- 31 *PAE 1950*, 1951, 199, fig.7, Lambrinoudakis 1981, 59-62.
- 32 Lambrinoudakis no date, 141.
- 33 この遺物の写真（図３）においては、土製像に二つの穴が穿たれていることを見て取ることができる。もしもこれらの穴が製作段階で設けられたものであるならば、そこに細い棒などを通して他の馬や戦車部分と連結させた可能性が推測される。
- 34 *PAE 1945-1947, 1948*, 1949, 101-103, *PAE 1976*, 1978, 208, pl.146b, Lambrinoudakis 1981, 62.
- 35 *PAE 1950*, 1951, 200, fig.10, Lambrinoudakis 1981, 62, Rutkowski 1986, 203, Wright 1994, 68.
- 36 Cf. Theodorou-Mavrommatidi 2010, 528-529.
- 37 Lambrinoudakis 2019, 119.
- 38 Lambrinoudakis 2019, 122-124. この遺跡にもたらされた時期や経緯を考えるに際しては、エビダウロス一帯からは他にもキクラデス文化の石偶が出土していることを考慮する必要がある（Piteros 2019）。
- 39 この遺跡同様に後代のコンテクストからキクラデス文化の石偶が出土したアルゴリスの事例として、Pappi 2019. アルゴスの原幾何学文様期の副葬品として納められていた。
- 40 初期幾何学文様期に関する資料はないと記載されているので（Lambrinoudakis 2002, 214）、亜ミケーネ期および原幾何学文様期も含めて初期鉄器時代の前半期には使用されていなかったと思われる。
- 41 Mazarakis Ainian 1997, 321-322.
- 42 中期幾何学文様期の終わり頃と記す文献がある（Lambrinoudakis 2002, 214）。
- 43 *PAE 1975*, 1977, 173, *PAE 1976*, 1978, 206-207, *PAE 1981*, 157. Cf. Lambrinoudakis 1988, 13.

- 44 Cf. Lambrinoudakis 1979, pl.A:1.
- 45 Lambrinoudakis 1984, 50-51. また幾何学文様期の土製像の破片も発見されている (Πέννα-Παπαϊωάννου 1985, 23)。
- 46 Lambrinoudakis 2002, 214.
- 47 Lambrinoudakis 2002, 214.
- 48 *PAE* 1977, 1980, 189-190.
- 49 Lambrinoudakis 2002, 214.
- 50 Langdon 1976. この遺跡に言及がある邦語文献として、高橋2001、41頁。
- 51 Langdon 1976, 55-56, 74-76.
- 52 Langdon 1976, 53-55, 74.
- 53 この遺跡に限らずエピダウロス一帯においては、初期鉄器時代前半期の資料が少ない (高橋2020、246-248)。

略記

PAE Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας

文献一覧

- Alcock, S. E. & R. Osborne eds. 1994: *Placing the Gods: Sanctuaries and Sacred Space in Ancient Greece*, Oxford.
- Κατάκης, Σ. Ε. 2002: *Επίδαυρος: Τα Γλυπτά των Ρωμαϊκών Χρόνων από το Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα και του Ασκληπιού*, Αθήναι.
- Lambrinoudakis, V. 1981: Remains of the Mycenaean Period in the Sanctuary of Apollon Maleatas, in R. Hägg & N. Marinatos eds., *Sanctuaries and Cults in the Aegean Bronze Age: Proceedings of the First International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 12-13 May, 1980*, Stockholm, 59-65.
- Lambrinoudakis, V.K. (B.K. Λαμπρινουδάκης) 1979: Σχέσεις Επιδαύρου και Κορίνθου υπό το Φως των Ανασκαφών, *Πρακτικά του Α' Συνεδρίου Αργολικών Σπουδών (Ναύπλιον 4-6 Δεκεμβρίου 1976)*, *Πελοποννησιακά Παράρτημα* 4, 28-36.
- 1980: Staatskult und Geschichte der Stadt Epidauros, *Αρχαιογνωσία* 1, 39-63. (筆者未見)
- 1984: Το Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα στην Επίδαυρο και η Χρονολογία των Κορινθιακών Αγγείων, *ASAtene* 60 (Nuova Serie XLIV) (1982), *Atti del Convegno Internazionale: Grecia, Italia e Sicilia nell' VIII e VII secolo a.C., Atene 15-20 ottobre 1979*, Tomo II, 49-56.
- 1988: Η Ανασκαφική Έρευνα στο Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα της Επιδαύρου, *Μέντωρ: Ενημερωτικό Δελτίο των Εταίρων της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας* 1, 12-17.
- 2002: Conservation and Research: New Evidence on a Long-living Cult. The Sanctuary of Apollo Maleatas and Asklepios at Epidauros, in M. Stamatopoulou & M. Yeroulanou eds., *Excavating Classical Culture: Recent Archaeological Discoveries in Greece*, Oxford, 213-224.

- 2019: Cycladic Figurine from the Sanctuary of Apollo Maleatas in Epidauria, in Marthari, Renfrew & Boyd eds. 2019, 119-125.
- no date: *Argolida: Archaeological Sites and Museums: Mycenae – Heraion – Argos – Tiryns, Nauplion – Epidauros*, Translated by A. Doumas, Editions Apollo.
- Langdon, M.K. 1976: *A Sanctuary of Zeus on Mount Hymettos*, Hesperia Supplement XVI, Princeton.
- Lupack, S. 2012: Mycenaean Religion, in E.H. Cline ed., *The Oxford Handbook of the Bronze Age Aegean (ca. 3000-1000 BC)*, Oxford, chap. 20, 263-276.
- Marthari, M., C. Renfrew & M.J. Boyd eds. 2019: *Beyond the Cyclades: Early Cycladic Sculpture in Context from Mainland Greece, the North and East Aegean*, Oxford & Philadelphia.
- Mazarakis Anian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered.
- Mee C. & A. Spawforth 2001: *Greece: An Oxford Archaeological Guide*, Oxford.
- Papadimitriou, J. 1949: Le sanctuaire d'Apollon Maléatas à Épidaure, *BCH* 73, 361-383.
- Pappi, E. 2019: An Early Cycladic Figurine from a Late Protogeometric Burial Context in Argos, in Marthari, Renfrew & Boyd eds. 2019, 132-139.
- Pavlidis, N. 2018: The Sanctuaries of Apollo Maleatas and Apollo Tyritas in Laconia, *BSA* 113, 279-305.
- Πέππα-Παπαϊωάννου, Ε. 1985: *Πήλινα Ειδώλια από το Ιερό του Απόλλωνα Μαλεάτα Επιδαυρίας*, Διδακτορική Διατριβή, Πανεπιστήμιο Αθηνών.
- Piteros, C. 2019: A Cycladic Figurine from Upper Epidauros, in Marthari, Renfrew & Boyd eds. 2019, 126-131.
- Rutkowski, B. 1986: *The Cult Places of the Aegean*, New Haven & London.
- Σφυρόερα, Α.Σ. 2020: Η Συγκρότηση της *Πόλεως των Επιδαυρίων*. Τεκμήρια από το Ιερό Απόλλωνος Μαλεάτα και Ασκληπιού, in Μ. Ξανθοπούλου *et al.* eds., *Το Αρχαιολογικό Έργο στην Πελοπόννησο 2: Πρακτικά της Β' Επιστημονικής Συνάντησης, Καλαμάτα, 1-4 Νοεμβρίου 2017*, Καλαμάτα, 405-415.
- Theodorou-Mavrommatidi, A. (Θεοδώρα-Μαυρομματίδη, Α.) 2003: Ανασκαφική Έρευνα στο Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα: η Πρωτοελλαδική Περίοδος, in Α. Βλαχόπουλος & Κ. Μπίρταχα eds., *ΑΡΧΟΝΤΗΣ: Τιμητικός Τόμος για τον Καθηγητή Χρίστο Γ. Ντούμα – Από τους Μαθητές του στο Πανεπιστήμιο Αθηνών (1980-2000)*, Αθήνα, 247-262.
- 2004: An Early Helladic Settlement in the Apollon Maleatas Site at Epidauros, in E. Alram-Stern ed., *Die Ägäische Frühzeit. 2. Serie. Forschungsbericht 1975-2002. 2. Band, Teil 2: Die Frühbronzezeit in Griechenland. Mit Ausnahme von Kreta*, 1167-1182.
- 2009: A Composite Pendant in an EH I Burial at the Apollo Maleatas Site in Epidauros: An Attempt at a Biography, in H. Cavanagh, W. Cavanagh & J. Roy eds., *Honouring the Dead in the Peloponnese: Proceedings of the Conference held at Sparta 23-25 April 2009*, CSPA Online Publication 2, The University of Nottingham,

Centre for Spartan and Peloponnesian Studies, chap.41, 773-780.

- 2010: Defining Ritual Action. A Middle Helladic Pit at the Site of Apollon Maleatas in Epidauros, in A. Philippa-Touchais, G. Touchais, S. Voutsaki & J. Wright eds., *Mesohelladika: La Grèce continentale au Bronze Moyen —Actes du colloque international organisé par l'École française d'Athènes, en collaboration avec l'American School of Classical Studies at Athens et le Netherlands Institute in Athens, Athènes, 8-12 mars 2006*, BCH Supplément 52, Paris, 521-533.
- Wright, J.C. 1994: The Spatial Configuration of Belief: The Archaeology of Mycenaean Religion, in Alcock & Osborne eds. 1994, 37-78.
- 2008: Early Mycenaean Greece, in C.W. Shelmerdine ed., *The Cambridge Companion to the Aegean Bronze Age*, 230-257.

浦野聡 2017:「古代地中海世界聖域の精神的・身体的トポグラフィー」、浦野聡編『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、1-45頁。

- 高橋裕子 2001:「初期鉄器時代のアテネとアッティカ」『史学雑誌』第110編第11号、36-61頁。
- 2020:「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」『マテシス・ウニウエルサリス』第21巻第2号、233-277頁。